

「あの人」の身体

—— 太宰治『駄込み訴へ』論 ——

奥村 七海

序論——作品成立と研究の流れ——

太宰治『駄込み訴へ』は一九四〇年二月一日発行『中央公論』第五十五年第二号「二月政変号」の「創作・新人特選」欄に発表されたのち、同年六月に『女の決闘』（河出書房）に収録、刊行された。また、月曜荘より、和綴じ限定私家版、三〇〇冊が一九四二年に刊行されている。^①

本作は〈語り手〉が作品終盤で「イスカリオテのユダ」と名乗ることからも明らかである通り、新約聖書の中心をなす人物であるイエスとユダの物語である。作品は、ユダが聴き手である「旦那さま」に対してイエスを訴え出るに至った経緯を話し、「銀三十」と引き換えに「イエス」を売るという四福音書に記述された通りの顛末を描くが、それを聖書の記述の裏側から照射するかのようには、ヘユダはなぜイエスを裏切り、殺したのかを明らかにしていく内容と

フェリス女学院大学日文学院紀要 第二十五号 (二〇二一年七月)

なっている。

すでに自明のこととされている通り、イエスが復活を遂げ、神の御子であるイエス・キリストとなるには、誰かが「人の子」であるイエスに「人の子」としての死をもたらさなければならず、イエスを殺す役割を担うものとして、ユダが存在している。これを裏付けるかのように、一九七〇年代のエジプト中部で、チャコス写本と呼ばれる「ユダの福音書」のパピルス写本が見つかっており、二〇〇六年にはナシヨナルジオグラフィック社が『原典 ユダの福音書』と題して、ユダが見たイエス・キリストの姿を伝える「ユダの福音書」の日本語訳版を出版している。^②「ユダの福音書」中のイエスは、「真の私を包むこの肉体を犠牲とし、すべての弟子たちを越える存在になるだろう」とユダに伝えており、まさに「イエスを復活させるべくして、イエスの指示によってイエスを殺すユダの像」をわれわれに提示しているのである。^③

「ユダの福音書」が、外典として聖書に収録されるには、かなりの時間を要すると思われるが、この『原典 ユダの福音書』が日本で翻訳、刊行され、衆目に触れることとなる六十六年前に、太宰は全く異なる観点から（ユダはなぜイエスを裏切り、殺したのか）という問いを立てているのである。

すでに指摘されているように、ユダの語りは①「あの人」と呼称されるイエスとの出来事についての回想、②過去の時点での「あの人」へ向けた自らの感情、そして③現時点でのユダの感情と、それぞれ時間的、空間的に異なる要素が錯綜しており、本作はイエスとユダの〈対立〉や、裏切りという行為そのものよりも、むしろユダの一人称の語りによって構成されることで、ユダがいかにして裏切りに駆り立てられたのかという点に焦点を当てていると言えるだろう。

成立状況については、津島美知子氏が「思ひ出の断片」⁵に語る通り、「口述筆記」によって成立した作品である。その後、『文学者』に発表された「義務」⁶では、本作を「ドラマ」として書いたことが語られており、これらを参照すればユダの一人称語りそのものに注力した作品であることがわかる。同時代的な作品受容としては、太宰の死後、平野謙氏や奥野健男氏によって、前期から中期への移行期における葛藤の表出として受容された。本作はつねに、二項対

立のはざまにある太宰」という作者の像を前提とした、作者への強い興味と関心によって語られてきたのである。

これらを含めて、本作の研究の流れを概観すると、(一) 作者である太宰治自身のキリスト教解釈への関心や作者の人生に対する興味を前提とするもの、(二) 語りに着目し、ユダとイエスの関係性を読み解こうとするもの、(三) 聖書本文、『聖書知識』、山岸外史『人間キリスト記』との比較を試みるもの、(四) 他作品における類似テーマの追究を試みるもの、(五) 言語学的な関心から本作の読解を試みるものの五つに分類することが出来るだろう。

まず(一) 作者である太宰治自身のキリスト教解釈への関心や作者の人生に対する興味を前提とするものとして、渡部芳紀氏『「駄込み訴へ」論』¹¹や鳥居邦朗氏『「駄込み訴へ」精神家の死』¹²、磯貝英夫氏『饒舌―両極思考』¹³「駄込み訴へ」を視座として¹⁴が挙げられる。次に(二) 語りに着目し、ユダとイエスの関係性を読み解こうとするものとして山田晃氏『聖書・論語・愛―「駄込み訴へ」雑記』¹⁵、高橋清隆氏『太宰治「駄込み訴へ」と聖書』¹⁶、西原千博氏『「駄込み訴へ」試論』¹⁷、山口造行氏『「駄込み訴へ」試論―「小鳥の声」の獲得』¹⁸、奥野政元氏『「駄込み訴へ」ノート』¹⁹、三谷憲正氏『太宰治「駄込み訴へ」再論―「私」と「あの人」の造型をめぐる』²⁰、北丸雄二氏『太宰治をクイアする』²¹、高塚雅氏『「駄込み訴へ」論

——「旦那様の不在」⁽²¹⁾がある。

さらに、(三) 聖書本文、『聖書知識』、山岸外史『人間キリスト記』との比較を試みるものとして菊田義孝氏「ユダの心——『駄込み訴へ』と山岸外史著『人間キリスト記』」、田中良彦氏「太宰治と『聖書知識』」⁽²²⁾、「太宰治と山岸外史」、三谷憲正氏「『駄込み訴へ』試論——「ヨハネ伝」との比較を通して」⁽²³⁾が挙げられる。さらに、(一)から(三)の研究動向を総括するものとして、木村小夜氏「『駄込み訴へ』論——反転し続ける語り」⁽²⁴⁾がある。

また、(四) 他作品における類似テーマの追究を試みるものには高橋英夫氏「ユダ的テーマの系譜」、佐藤泰正氏「『駄込み訴へ』と『西方の人』——イエスの転移をめぐる」、東郷克美氏「太宰治の話し法——女性独白文体の発見」⁽²⁵⁾を挙げることが出来る。

(五) 言語学的な関心から本作の読解を試みるものには、森厚子氏「太宰治『駄込み訴へ』について——語りの構造に関する試論」⁽²⁶⁾、「野松循子氏「文体・表現から見た『駄込み訴へ』」、相馬明文氏「太宰治の表現——閉鎖する発話空間」が見られ、その他、文芸誌掲載の評論等を数に入れれば、枚挙に暇がない。

これらの研究成果を踏まえたくて、本稿においては翻案作品という本作の前提に立ち返り、聖書との詳細な対比を試みるとともに、イエス＝キリストの身体がユダの語りに対していかにして作用

するのかを検討し、これまで「対立」という言葉によって語られてきた、ユダとイエスの関係性を問い直していくことを目的とする。

一・翻案作品としての『駄込み訴へ』と

イエスへ向けるユダの評価

序論でも指摘したことであるが、本作は「新約聖書」の物語をユダが回想によって語り直していくという結構を持つ。「新約聖書」からの物語の引用は、ユダの回想を基準に数えると十七か所である。⁽²⁷⁾

さらに、これらを概観すると、「新約聖書」に描かれるイエスの伝道の旅の道筋を「マタイによる福音書」および「マルコによる福音書」に拠り、ベタニアのシモンの家における塗油の場面以降、エルサレム入城までの時系列は「ヨハネによる福音書」から採用されていることが分かる。神殿を壊した後、「私は三日の間に、また立て直してあげるから」とイエスが語る場面は「ヨハネによる福音書」第二章十九節にのみ見られ、他の福音書では記述が見られない。さらに注目すべきは、「ヨハネによる福音書」において、神殿から商人を追い出す物語が伝道の旅の序盤に配置されている点であろう。すなわち、本作におけるエルサレムでの出来事は、「マタイによる福音書」、「マルコによる福音書」、「ルカによる福音書」と同じ順序

で語られるが、その描写には「ヨハネによる福音書」において描写されたイエスの言動を含んでいるのである。

このほかにも、マルタとマリア姉妹の人物形象については「ルカによる福音書」十章三十八節から四十二節に二人の詳細な特徴が描かれており、他の福音書にはその記述がない事から、本作における「マリヤ」の特徴を「ルカによる福音書」から採用していることが明らかであるし、断食をする際の教えは「マタイによる福音書」十六章十六節から十八節にのみ見られ、こちらも他の福音書には記述されていない。さらに、イエスを殺す計略に際し、金銭の授受が記述されているのは「マルコによる福音書」「ルカによる福音書」の二つであるが、「三十銀」という具体的な数字が提示されるのは、「マタイによる福音書」のみである。なお、「マタイによる福音書」におけるこの数字は、イエスが引き渡されたのち、ユダの自殺が記述される箇所である二十七章三節に登場するのみである。すなわち、イエスの伝道の旅と「新約聖書」に描かれた物語のおおまかな順序については、先述の通り「マタイによる福音書」と「マルコによる福音書」を採用し、その細部は「ルカによる福音書」「ヨハネによる福音書」の挿話を翻案することで、より詳細かつ具体的な物語として補っているのである。

すなわち、本作は作者である太幸による「新約聖書」の改変や時

系列の変更、取捨選択を伴ってユダの語りへと再構成されていくのである。つまり、ユダが見たイエスの像は、あくまで作者である太幸によって意図的にゆがめられた像となることは明らかであろう。

ユダが〈語り手〉となる本作は、ユダがイエスに対する評価を述べる場面から始められる。作品の序盤において、ユダはイエスについて「なんでもご自身で出来るかのやうに、ひとから見られたくてたまらない」が、一方で「何にも出来やしない」人物であると否定的な評価を示し、さらに次のように述べる。

私から見れば、子供のやうに慾が無く、私が日々のパンを得るために、お金をせつせと貯めたつても、すぐにそれを一厘残さず、むだな事に使はせてしまつて。けれども私は、それを恨みに思ひません。あの人は美しい人なのだ。私は、もともと貧しい商人ではありますが、それでも精神家といふものを理解してゐると思つてゐます。

引用の傍線部から明らかである通り、ユダは自らの経済的な才覚に対して自覚的であると^⑧ともに、「商人」ユダが付き従うイエスには、生活能力の欠如を指摘する。つまり、既に成人であるイエスに「子供のやう」な無欲を見出す彼は、世俗的な価値観にとらわれないうイエスを評価していると言えるだろう。ユダは、彼がいなければ「何もできない」「子供のやう」なイエスの像を讀者へ提示するとと

もに、何もできないからこそ美しくあるイエスを、「美しい人」として絶対的に評価していることを、作品の前提として明らかにしているのである。さらに、その評価はイエスとの並列関係以上に、「上下関係」を望むユダによる「庇護者」としての欲望をはらんでいることは、すでに西原千博氏が指摘した通りである。くわえて、「何も出来やしない」にも関わらず、イエスその人を求めるユダは、唯一絶対の他ならぬ「あの人」を志向しているのであり、ユダにとってのイエスは代替不可能な「あの人」なのである。

さらに、ユダがイエスに向けた肯定的な評価は、「ペテロやコブ」をはじめとするほかの弟子たちがイエスに向けるまなざしとは対照的であるという認識の表出であり、イエスに対する「理解」によつて、自らが他の弟子たちから抜き出ているという優位性をも明らかにしていると言えるだろう。くわえて、イエスに対する「理解」を下地として、ユダ自身もまたイエスに対し同様の「理解」を望む箇所が見られる。以下は、ユダがイエスに対する「理解」を望むことが顕著にみられる箇所である。

①寂しいときに、寂しさうな面容をするのは、それは偽善者のすることなのだ。寂しさを人にわかつて貰はうとして、ことさらに顔色を変へて見せてゐるだけなのだ。まことに神を信じてゐるならば、おまへは、寂しい時でも素知らぬ振りをし

て顔を綺麗に洗ひ、顔に膏を塗り、微笑んでゐなされるがよい。わからないかね。寂しさを、人にわかつて貰はなくても、どこか眼に見えないところにあるお前の誠の父だけが、わかつてゐて下さつたなら、それでよいではないか。

a 断食をするときには、あなたがたは偽善者のように暗い顔つきをしてはならない。彼らは断食しているのが人に見えるようにと、顔を隠すしぐさをする。よく言つておく。彼らはその報いをすでに受けている。あなたは、断食するとき、頭に油を塗り、顔を洗いなさい。あなたの断食が人に見られることなく、隠れたところにおられるあなたの父に見えただくためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父があなたに報いてくださる。

(マタイ6:16-18)

この挿話は「マタイによる福音書」六章十六節における断食についての教えを説いた箇所から翻案されており、傍線によつて示した通り「断食」は「寂しさ」に変更されている。「断食」という具体的な対象ではなく、抽象的な「寂しさ」への変更は、ユダとイエスの決別に至る道筋を、「新約聖書」の実現において不可避の出来事から、二人の人物における感情のすれ違いへと、その問題をずらししていくと言えるだろう。すなわち、「断食」という行為の持つ宗教的な要素を「寂しさ」に変更することで振り払った本作は、〈語り手〉

「であるユダを「我々ひとりひとりに帰」したのである。」「寂しさ」に対する「理解」を「天の父」にのみ望むイエスの言葉が語られた後、イエスの言葉に向けられたユダの心情は次の通りである。

私は天の父にわかつて戴かなくても、また世間の者に知られなくても、ただ、あなたお一人さへ、おわかりになつてゐて下さつたら、それでもう、よいのです。

「天の父」ではなく「あなたお一人」に「理解」を望むユダは、高橋清隆氏が指摘するように、「寂しさ」を共有する相手として、イエスを志向していると言えるだろう。それはイエスを「自分を理解してくれるたった一人の相手」として占有する欲望である。

先述の通り、ユダがイエスに向ける評価を見れば、彼は自らの経済的な能力に対して自覚的であるとともに、対照的とも言えるほどに無欲であり、無力であるイエスを「美しい人」として評価していることは明らかである。さらにユダは、本来の意味におけるそれであるか否かは別としても、彼自身がイエスに向けている「理解」を、同様に通わせることが出来る相手として、イエスを望んでいるのである。つまり、無欲であり無力であるイエスを傍に置きたいという欲望は、占有すらも超えた支配欲ですらあると言えるだろう。一方で、作品そのものがユダの密告であるということは、ユダが欲望するイエスの像が否定されることを意味している。ユダが語ろうとす

る、無欲にして無力であり、ユダの欲望に適うイエスの像と、語られるべき現実のイエスの像の間におけるずれは、イエスの身体が語られる箇所にも、その端緒を見出すことが可能であろう。

二 「ベタニヤのシモンの家」での「ジエラシイ」

本作における塗油物語は、「ヨハネによる福音書」から翻案され、取り入れられていると考えられる。このことは、「マリヤ」の行いに対する叱責が弟子たちという不特定多数のものではなく、ユダ一人によるものとして記述されている点から推測できる。「耻込み訴へ」において、ユダがイエスを殺す考えを抱くようになる契機となるのが、この塗油物語である。

「ベタニヤのシモンの家」の「マリヤ」が、イエスに対して香油を注ぎかけ、髪の毛で拭う場面が展開されるのであるが、ユダは「マリヤ」の行為に対して次のように憤る。

①（前略）まことに異様な風景でありましたので、私は、なんだが無性に腹が立つて来て、失礼なことをするな！と、その妹娘に怒鳴つてやりました。これ、このやうにお着物が濡れてしまつたではないか、それに、こんな高価な油をぶちまけてしまつて、もつたないと思はないか、（中略）この油

を売って三百デナリ儲けて、その金をば貧乏人に施してやつたら、どんなに貧乏人が喜ぶか知れない。無駄な事をしては困るね。

a 弟子の一人で、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った。「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」 (ヨハネ12:5)

引用の、二重傍線で示した箇所は、「ヨハネによる福音書」に記載されるユダの言葉と一致する。⁽⁴⁾ 一方の一重傍線部については、「新約聖書」にはその記述が見られない。高価な香油をイエスに注ぎ、自らの髪の毛でイエスの足をぬぐうという、「マリヤ」にできる限りの最大の敬意の表現であり、また、奉仕の表現、あるいは愛情の表現として福音書中に意味づけられる「マリヤ」の行いを、ユダは「異様な光景」として認識したのである。また、「新約聖書」に記載されていないユダの叱責の原因を、本作では「異様な光景」に織り込むことによって、ユダの怒りが呼び起された契機が明かされている。

彼はまず、「マリヤ」の行為によって「お着物が濡れ」たことに對して憤るが、その直後には「金をば貧乏人に施す」べきであったと、ユダの資質ともいえる経済的な観点から、彼自身の怒りを合理化していると言えるだろう。「油」を注がれた当人であるイエスが

どのように受け取るかを問題とするかのように、「失礼なことをするな」と憤るものの、本来注目すべき対象となるイエスの表情や仕草にはこの段階では触れていない。自身の憤りを正当化し、かつ合理化する手段として「お着物」に注目し、「油」の商品としての価値に着目した上で怒りをあらわにするのである。

一方で、イエスは、ユダの憤りに対して次のようにそれを制する。

②「この女を叱つてはいけない。この女のひとは、大変いい事をしてくれたのだ。貧しい人にお金を施すのは、おまへたちには、これからあとあと、いくらでも出来ることではないか。私には、もう施しが出来なくなつてゐるのだ。そのわけは言ふまい。この女のひとだけは知つてゐる。この女が私の身体に香油を注いだのは、私の葬ひの備へをしてくれたのだ。」 (後略)

b「この人のするままにさせておきなさい。わたしの埋葬の日のために、それを取っておいたのだから。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、私はいつも一緒にいるわけではない。」 (ヨハネ12:7)

引用部分の二重傍線部は「ヨハネによる福音書」から翻案された言葉であり、一重傍線は太宰による創作である。ユダによる価値判断を覆したイエスは、「マリヤ」の行為を肯定的に評価し、「この女

のひとだけは知つてゐる」と述べる。イエスはこの言葉によつて、ユダの憤りと、その根底にある「理解」の欲望に拒絶を示したと言へるだろう。香油を注ぐという行為は、イエスがメシアとなるのに必要不可欠な行為であり、少なくともその行為の必要性に対する「理解」が「マリヤ」とイエスの間に存在しているのである。くわえて、イエスとの間における「理解」を強く望むユダは、二人がまさにユダの眼の前で通わた「理解」の中に存在しない。さらに、ユダにしてみれば無欲であり、無力であるはずのイエスが、ユダの叱責に對して抗議の態度を示しているのである。ユダは後に続く「あの人の言葉を信じません」という宣言の通り、イエスの言葉から耳をふさぐかのように、イエスの身体に着目することになる。

あの人の青白い頬は幾分、上氣して赤くなつてゐました。私は、あの人の言葉を信じません。(中略)その時、あの人の声に、また、あの人の瞳の色に、いままで嘗つて無かつた程の異様なものが感じられ、私は瞬時戸惑して、更にあの人の幽かに赤らんだ頬と、うすく涙に潤んでゐる瞳とを、つくづく見直しはつと思ひ当たることがありました。(中略)あの人は、こんな貧しい百姓女に恋、では無いが、まさか、そんな事は絶対に無いのですが、でも、危い、それに似たあやしい感情を抱いたのではないか？

イエスの身体の変化である「青白い頬」が「上氣して赤くなつてゐる」様、「声」、「瞳の色」に「異様なもの」を感じたユダは、そこにイエスが「マリヤ」に向けた「恋、ではないが、(中略)それに似たあやしい感情」を見出すのである。いうまでもなく、イエスの身体に関する描写は「新約聖書」の中には見られない。この発見は、まぎれもなく「あの人の言葉を信じません」という、「新約聖書」に記述されないユダの宣言によつて導かれると言へるだろう。

「お着物が濡れ」たことに憤り、「あの人の言葉を信じ」ないことで、イエスの身体に視線を向けざるを得なかつたユダは、他ならぬいその態度によつて、「言葉を信じない」ユダが何よりも欲していたであろう、「マリヤ」とイエスの間にある「言葉を必要としない「理解」」を突き付けられるのである。この二人の間の「理解」は、それがそのまま、自らが「理解」していると認識していたイエスについて、ユダが「マリヤ」と同様の「理解」に至ることが出来ないことを意味している。

他の弟子たちに対しての優位性を認識しながら、イエス占有の欲望を果たしていないユダにしてみれば、このイエスと「マリヤ」との間における身体的な接触と、それに伴う「理解」を許すことは出来なだろう。また、ユダに向けられないイエスの「理解」が、何故「マリヤ」に向けられたのかという疑問とともに、語り手自らも

そう語っているように、「ジエラシイ」としてユダに知覚されるのである。

塗油物語に付随するイエスの「恋」に触れたユダは、作品冒頭で語ったイエスを占有しようとする欲望を転換させ、イエスに向ける強い欲望を、「あの人を殺して私も死ぬ」という、イエスの殺害をも企てる、非常に激しい感情として語るのである。

三. 二人の接触と「パン」の意味

洗足の場面は、「ヨハネによる福音書」十三章四節から十節にのみ記録されており、ユダとイエスの身体的接触が描かれる。「新約聖書」に語られる洗足は、死を前にして弟子たちに対する模範を示すための行為として説明される。相手の最も汚れた足を洗う行為は、敬愛をも意味するのであるが、敬愛の表出としての洗足は、先述の「マリヤ」による塗油物語の場面にもその構造を見ることが出来るだろう。イエスによる洗足を受けたユダは、次のように語っている。

あの方は、寂しいのだ。極度に気が弱つて、いまは、無知な迷の弟子たちにさへ縋りつきたい気持ちになつてゐるのにながひない。可哀想に。あの方は自分の逃れ難い運命を知つてゐるのだ。(中略) 矢庭にあの人を抱きしめ、共に泣きたく思ひま

した。おう可哀想に、あなたを罪してなるものか。あなたは、いつも優しくかつた。あなたは、いつでも正しかつた。あなたは、いつでも貧しいものの味方だつた。さうしてあなたは、いつもも光るばかりに美しかつた。あなたはまさしく神の御子だ。私はそれを知つてゐます。

イエスの行為を、「寂し」として受容したユダは、「マリヤ」との行為によつて目の当たりにした「理解」をユダと共有することのないイエスを、再び「理解」を通わせることのできる存在として認識する。「逃れ難い運命」とは、いうまでもなく「人の子」としてのイエスの死を意味しており、自らの死に際して規範を示すべく行われた洗足の行為そのものが、ユダの視点を通して「縋りつきたい気持ち」から来る行為へとゆがめられているのである。

さらに、イエスの「理解」を得た「マリヤ」の行為が、イエスによつてユダに繰り返されることで、ユダはイエスとの「言葉を必要としない「理解」を可能にしたと錯覚するのである。ユダが望む「寂しさ」を共有する相手としてのイエスの像が、洗足の行為を介して再現されたことによつて、ユダは一時的に欲望を達成する。彼は欲望の達成によつて、イエスを「優しくかつた」「正しかつた」「美しかつた」と、絶対的な肯定の態度によつて評価する。これは、「マリヤ」との間に通わされた「理解」を突き付けられた際に「凡夫」

としてイエスを拒んだユダとは対照的な視点と言えらるう。また、「あなたはまさしく神の御子だ」という言葉から明らかである通り、ユダにとっては「理想化されたイエスの像」のみが「神の御子」たり得るのであって、ユダを虐げ、かつユダによる「理解」を拒むイエスはあくまで「凡夫」であり「気取り屋の坊ちゃん」なのである。しかしながら、イエスは、ユダをあくまで拒絶する。

①すつと腰を伸ばし、瞬時、苦痛に耐へかねるやうな、とても悲しい眼つきをなされ、すぐにその眼をぎゅつと固くつぶり、つぶつたままでも言ひました。「みんなが潔ければいいのだが。」はツと思つた。やられた！私のことと言つてゐるのだ。

a イエスは言われた。「すでに体を洗つた者は、全身清いのだが、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」
(ヨハネ13:10)

a の引用に見られる、イエスの「皆が清いわけではない」という言葉を導くように、「耻込み訴へ」においては「重傍線部で示した通り、本来であれば福音書には記述されていないイエスの身体が描かれている。ユダは洗足を施された段階では、「あなたを罪してなるものか」と語り、「あの人を殺す」考えを手放していたのであるが、イエスの言葉を受けたユダの意識はさらに強固に「あの人を、殺さ

う。そうして私も共に死ぬのだ」と「復讐の鬼」へと転化する。イエスは、身体的接触による「潔め」が達成されていないことを明らかにし、ユダとの間に「理解」を拒むこと、すなわちユダがイエスに向ける感情を拒否することによって、ユダの「あの人を殺し」て「私も死ぬ」という行為を導こうとしていると言えるのではないだろうか。そしてそれは、きまつてユダが「あの人」の身体に注目するときに起こるのである。

この洗足の場面の直後に、イエスはさらにユダを密告へと突き動かしていく。「裏切りの宣告」は四福音書すべてに記述されているが、イエスがユダにパンを与える描写がある点、「しようとしていることを、今すぐ、しなさい」とイエスによる行為の促しが描かれる点から、「ヨハネによる福音書」に典拠を求めることが出来る。

②「おまへたちのうちの一人が、私を売る。」と顔を伏せ、呻くやうな、歎歎なさるやうな苦しげの口調で言ひ出したので、(中略)「私がいま、その人に一つまみのパンを与へます。その人は、ずいぶん不仕合せな男なのです。ほんたうに、その人は、生まれて来なかつたはうが、よかつた。」と意外にはつきりした語調で言つて、一つまみのパンをとり腕をのばし、あやまず私の口にひたと押し当てました。私も、もうすでに度胸がついてゐたのだ。恥ぢるよりは憎んだ。あの人

の今更ながらの意地悪さを憎んだ。このやうに弟子たち皆の前で公然と私を辱めるのが、あの人の之までの仕来りなのだ。(中略) 犬か猫かに与へるやうに、一つまみのパン屑を私の口に押し入れて、それがあいつのせめてもの腹いせだったのか。ははん。バカな奴だ。旦那さま、あいつは私に、おまへの為すことを速かに為せと言ひました。

b イエスはこう話し終えると、心を騒がせ、証しして言われた。「よくよく言っておく。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている。」弟子たちは、誰のことを言われたのか察しかねて、顔を見合わせた。イエスのすぐ隣には、弟子たちの一人で、イエスの愛しておられた者が席に着いていた。シモン・ペトロはこの弟子に、誰について言っておられるのかと尋ねるやうに合図した。その弟子が、イエスの胸元に寄りかかったまま、「主よ、それは誰のことですか」と言うと、イエスは「わたしがパン切れを浸して与えるのがその人だ」とお答えになった。それから、パン切れを浸して取り、シモンの子イスカリオテのユダに、お与えになった。ユダがパン切れを受けるやいなや、サタンが彼の中に入った。そこでイエスは、「しようとしていたことを、今すぐ、しなさい」と彼に言われた。

(ヨハネ 13 : 21 - 30)

「新約聖書」においては、bの二重傍線で示したように、イエスがユダにパンを与える際に「シモンの子イスカリオテのユダに、お与えになった」とあり、さらにユダがパンを「受ける」描写がある。一方で、作品本文の引用から明らかであるとおり、本作におけるユダはパンを口に「押し当て」られ、「パン屑を」「口に押し入れ」られている。この時、ユダは徹底して受動的な態度であると言えるだろう。くわえて、ここでも「心を騒がせ」の一言に収められているイエスの様子が「顔を伏せ、呻くやうな、歎歎なさるやうな苦しげの口調」と、身体の様子を伴い描写されている。

いうまでもなく、パンの授受から連なるユダの密告は、イエスの死と復活をもたらすための行為である。それはいわば、「マリヤ」による塗油、そしてイエスの死同様に「逃れ難い運命」なのであるが、ユダは行為に付随する役割に着目するよりもむしろ、「一つまみのパン屑を私の口に押し入れ」るイエスの行いを、「辱め」として認識し、彼を憎悪する。この場面においてもまた、イエスはユダに対して、無欲かつ無力であるというユダの理想とするイエスの像との間にずれを生じさせながら、ユダを導いていると言えるだろう。理想とするイエスの不在を悟ったユダは、二人の間における「理解」を自身に認めることが出来ずに、決別を選び取っていくのである。

一方で、ユダの表現ではなく、ユダによって表現されるべき事実

にのみ着目するとき、そこには語られるべき現実と表現された認識との間のずれを見出せる。言い換えれば、ユダが求め続けたイエスとの間における「理解」が既に存在していることが指摘できるのではないだろうか。すなわち、本作においてユダ自らが切り捨てていくこととなる、イエスがユダに与えた赦しと信頼が、他ならぬユダの語りによつて暴かれているにもかかわらず、ユダは無自覚にそれを拒絶していくという、アイロニカルな構造が露呈するのである。

聖餐式は、最後の晩餐を想起し、キリストの体であるパンを食べ、キリストの血であるぶどう酒を飲むことを通して信徒たちに罪の赦しを与える儀式である。(後略)

他方、ジュネーブの宗教改革者カルヴァンは、聖餐式において信徒はパンとぶどう酒という物質的手段を食しながら、キリストの体と血とを霊的に食するとした。(『キリスト教綱要』第四編第一八章)

(原口尚彰「信じる」と知ること―新しいキリスト教概説―)⁽⁴³⁾
「ヨハネによる福音書」をのぞく三福音書に記述された、裏切りの宣告に続く最後の晩餐の場面では、イエスは「パン」が自らの身体であることを述べたうえで弟子たちにパンを与える。引用のとおり、キリスト教世界では「最後の晩餐を想起」して聖餐式が行われる。

聖餐式における「罪の赦し」とは、岡田温司氏によれば「原罪における負の遺産」、すなわち「創世記」において、アダムとエバが「善悪の知識の木」から果実を取って食べたことに起因する「罪」⁽⁴⁴⁾に与えられる「赦し」である。氏は「キリストの身体を食べることによって、(中略)罪がひとまず帳消しにされる」とし、聖餐とアダムとイブが食によって犯した罪とを「対照的にかつ補完的な関係」と見なしている。⁽⁴⁵⁾すなわち、食べる行為によって引き起こされた罪を、同じく食べる行為によってあがなうのである。

さらに、「マタイによる福音書」では「私と一緒に手で鉢に食べ物浸した者」(26:23)、「マルコによる福音書」は「わたしと一緒に食事をしている者」(14:20)、「ルカによる福音書」には「わたしと一緒に手を食卓に置いている」(22:21)者の裏切りを予告する一方で、ことに「ヨハネによる福音書」においては、「パン」を与えているのである。この「ヨハネによる福音書」における「パン」の遣り取りと、それに続く「おまへの為すことを速かに為せ」という言葉は、荒井猷氏によれば、「イエス自身の積極的な促し」であり、「聖書が成就されるため」の行為として説明される。⁽⁴⁶⁾

つまり、「ヨハネによる福音書」では、イエスはユダに対して、自らの体を託すとともにユダを促し、またユダはイエスの身体である「パン」を取り入れたことによって、すくなくとも「ヨハネによ

る福音書」においては赦されていると考えられる。

『耻込み訴へ』に論を戻せば、イエスは「押し込」むという言葉が意味するように、ある種の強制力を持つて、ユダに「キリストの身体」を取り入れさせたのである。それは、ユダがそれを望むか否かに関わらず、イエスが自らの身体によって、密告へとユダを駆り立てていくことを意味すると言えるだろう。いずれにせよ、イエスにとつてのユダは、聖書⁽⁴⁷⁾という神の意思が成就されるための人的手段にほかならないのである。すなわち、本作の語り手ユダは、「ユダの福音書」と対応するかのようには、「真の私（論者註…イエスを指す）を包む肉体を犠牲とし」、イエスを復活させるべくして、イエスの体を引き受けるのである。

四．同化するユダとイエス

「パン」を巡るやり取りを語った後、ユダは「旦那さま」をイエスの元へ向かうように促す。ところが、イエスの対価として「三十銀」を差し出した「旦那さま」に対して、ユダは次のように憤る。

私に、三十銀。なるほど、いや、お断り申しませう。(中略)
金が欲しくて訴へ出たのでは無いんだ。ひっこめろ！ いいえ、ごめんなさい、いただきますせう。さうだ、私は商人だったのだ。

(中略) いやしめられてゐる金銭で、あの人に見事、復讐してやるのだ。

「三十銀」を手渡され、一度はそれを拒むものの、自身が「商人」であり、「金銭」によってイエスに「いやしめられてゐる」たことに思い至り、「復讐」を果たそうとする。つまり、ユダは無欲にして無力であるイエスと対照的である、自らの経済的な能力、さらにその資質によってイエスを「売る」ことを可能にしていくのである。さらにそれは、イエスがたどろうとした「旧約聖書」に記述される、「三十銀」によって神に遣わされた存在を値踏みした、「羊の商人」の役割を担うことをも意味するのである。

ユダの語る言葉は、「あの人を殺して私も死ぬ」、「復讐」という目的を語り続け、あくまで個人的な「復讐」と、「あの人」の「美の防衛」⁽⁴⁸⁾が前景化されている。しかしながら、ユダは作品の序盤においてすでに、「復讐」と「美の防衛」こそが自らの「逃れ難い運命」であることを理解しているようにも見える。

ペテロやヤコブたちは、ただ、あなたに附いて歩いて、何かいいこともあるかと、そればかりを考えてゐるのです。けれども、私だけは知つてゐます。あなたに附いて歩いたつて、なんの得るところもないといふことを知つてゐます。それでゐながら、私はあなたから離れることが出来ません。

先述の通り、ユダはほかの弟子たちに対する優位性を認識しながらイエスに付き従って行くのであるが、「得するところもない」ことを知りながら「離れることが出来ない」と語っている。離れたくないのではなく、「離れること」がそもそも不可能であるという表現の通り、ユダの意志のあずかり知らぬところにその原因があると云えるだろう。それはすなわち、ユダがイエスに向ける強い感情もまた、イエスが「新約聖書」中に度々語った、父の「杯」（マタイ26・42）の中にあることの証左である。

ユダは他の弟子と異なることよってイエスを「理解している」と認識し、イエスは成人男性でありながら「子供のやうに慾がなく」、「何にも出来やしない」点よってユダに評価されてきた。さらに、ユダは（人の子であるイエスを殺し、イエス＝キリストとしての復活を導く存在）であり、イエスは（自らの死を以って神と人との断絶を取りなす存在）である。いわば二人は代替不可能な関係性であり、その一点よって等しい存在と云えるのではないだろうか。これは、ユダがイエスを密告する際に、二人が「同じ」であることを繰り返すことからも明らかであろう。

あの人は、私の師です。主です。けれども私と同じ年です。三十四であります。私は、あの人よりたつた二月おそく生れただけなのです。たいした違ひが無い筈だ。（中略）それなのに、

私はけふ迄あの人に、どれほど意地悪くこき使はれて来たことか。

引用は、冒頭に見られる言葉であるが、「同じ年」、「たいした違ひが無い筈」と、二人があくまで同等の存在であることを強調する。作品終結部にも同様に、ユダがイエスと「同じ」であることを述べる箇所が見られる。

私は今夜あの人と、ちゃんと肩を並べて立つてみせます。あの人を怖れることは無いんだ。卑下することは無いんだ。私はあの人と同じ年だ。同じ、すぐれた若いものだ。

先の引用が示した、二人が「同じ」であるという点について、作品終結部であるこの引用にも同様に、「肩を並べて立つ」、「同じ年」「同じすぐれた若いもの」と、「同じ」であることを繰り返して訴える。この場面における密告は、ユダの意志によれば個人的な「復讐」および「美の防衛」として位置付けられるが、また他方では、他の弟子たちに対する優位性を語り続けたユダが、「新約聖書」が実現されるべくして、（人の子であるイエスを殺し、イエス＝キリストとしての復活を導く）役割を担い、かつイエスと等しい存在であることを証明するための行為へと移行しているのである。

いまいちど、「パン」を与えた意味について着目すれば、繰り返して「同じ」であることを語るユダが明らかにするように、ユダが

「パン」を受け取ったとき、既にイエスとユダは「同じ」存在たり得ることが読み取れる。ユダの感情を揺さぶり続けたイエスの身体を、「霊的」に取り入れた段階から、ユダはイエスの意志の代行をしているに過ぎなかつたのではないだろうか。そして、その意志の代行は、「同じ年」、「同じ、すぐれた若いもの」と、彼の回想を挟むかのように作品冒頭と終結部で言及される、等価性によって明らかにされているのである。

くわえて、それは無欲にして無力であり、現世的な価値を求めず、さらには救世主となる唯一絶対の存在であるイエスを評価してきた、あるいはそうしたイエスを「知っている」「理解してゐる」と語り、自らもまた他の弟子たちに対して優位性を認識しているユダにのみ可能な行為であつたと考えられよう。つまり、「無能でとんま」、「無知頑迷」の弟子たちと語られる、周囲の弟子たちではなし得ない行為なのである。ある意味において対照的であり、かつ「逃れ難い運命」を担わされたという点において、イエスとユダの二人は同一であり、まさに「ユダの福音書」に記述されているように、「イエスを殺し、イエス・キリストとして復活させるための人的手段」としてのユダと、イエスの関係性が、『駈込み訴へ』において既に提示されているのである。

結論——融解するユダとイエス——

以上の通り、ユダは密告という自らの役割をイエスの身体性によって促され続け、ついにイエスとの決別に至るのであるが、その決別は「キリストの身体」とされる「パン」によってイエスの体を委ねられたことで、イエスの意志を代行することをも意味していく。さらに、そのイエスの意志の代行は、ユダがそれを「義務」とし、作品序盤と集結部において自らの存在をイエスとの等価性によって語っていたことを踏まえれば、他の弟子では担い得ない、避けがたいものであつたと言える。イエスに対して「理解」を通わせることを欲望したユダは、語りはじめた段階において、既に他ならない「あの人」によって代替不可能な役割を担わされているのである。それは、イエスが「春の浜辺」で「おまへにも、お世話になるね」とユダをねぎらつた出来事を語つたことから明らかであろう。

一方で、ユダの語りは、私的な「復讐」と「美の防衛」が前景化されているように、あくまで「理解」を通わせることが出来る「あの人」としてのイエスを保存しようとしているのである。つまり、イエスが望むユダの像は（人の子であるイエスを殺し、イエス・キリストとしての復活を導く存在）としてのユダであり、それは先述の通り「パン」を介したイエスとの同化を経て、イエスの人的手段

足り得るユダである。しかしながら、ユダが望むのは「理解」を通わせることが出来る「あの人」の存在そのものなのである。いかに二人が「パン」によって同化を果たし、ユダがイエスの人的手段になろうとも、そこには二人の欲望の間における決定的なずれが存在しているのである。

ユダがイエスに向ける強い感情を「同性愛的」という言葉によって捉えたのは、第二章で挙げた高橋清隆氏「太宰治「駈込み訴へ」と聖書」が、管見の限り最初のものである。さらに、こうした観点からの指摘には、同じく第二章に掲出した北丸雄二氏「太宰治をクイアする」が続く。研究史のごく初期において山田氏が指摘した通り、愛が「人が人にさしむける強い関心の総名」⁵⁰⁾であるとすれば、ユダ本人が「私の義務」と位置付けたその密告を、一方では「私のひたむきの愛の行為」とさえ語っているのであるから、この一連の密告はユダの愛の告白と捉えることも可能であろう。

同性愛の定義が、「その性的指向 sexual orientation が同性にあること、すなわち同性に対して性的感情を抱くこと」⁵¹⁾であり、性愛が概して身体と結びつくものであるとするならば、ユダがイエスによる洗足に際して実現した身体的接触と、それに伴う昂揚に着目するとき、高橋氏、北丸氏の両氏が指摘した同性愛的感情は否定できない。周知の通り、カトリック世界においては、生殖を伴わない愛

およびそれに付随する性的結合が禁じられてきたにもかかわらず、太宰はユダの裏切りという「新約聖書」の事実に向けられた、（ユダはなぜイエスを裏切り、殺したのか）という問いから出発し、キリスト教世界における禁忌を犯して見せたかのようにも見える。

しかしながら、太宰は、ユダが自らイエスに触れた場面をユダに語らせない。「新約聖書」においてユダが「接吻で人の子を裏切る」（ルカ22:47⁵²⁾と描写されるように、親愛や敬意を表す行為としての接吻を合図として、ユダがイエスを裏切る場面を、彼自身が語ることなく作品を終えたことから明らかであろう。すなわち、「パン」の授受に続くユダとイエスとの最後の身体的接触が、本作においては達成されていないのである。既に指摘したように、あくまで本作におけるユダは、イエスその人を、「理解」を通わせることのできる「あの人」そのものとして自らの傍に置くことを希望している。それはイエスとの決別を選び、イエスとの同化と、向けられた信頼を拒み続ける語りによって明らかにされている。すなわち、身体的接触を契機としたイエスの意志の達成は、「駈込み訴へ」の登場人物であるユダにしてみれば、自らがイエスと同化したことによつて引き起こされる、他ならない「あの人」の死を受け入れることを意味するのである。

イエスとユダの二者関係においては、語る行為の完了が、ユダの

望まない（人の子であるイエスを殺し、イエス・キリストとしての復活を導く）行為の完遂であるから、イエスの死はユダの語りが完了した時点で不可避のものとなる。すなわち、イエスから「離れることが出来」ずに、イエスの身体を引き受け、さらに死へと引き渡す存在^⑤という唯一の役割をユダが「義務」として担った時点で、ユダはイエスと「同じ」存在であり、二人は唯一絶対の役割を担う相補的な関係性にあると言える。二人が「逃れ難い運命」の中にある以上、「理解」を通わせることは、そのまま「あの人」の死を内包しているのである。

ユダが語ってきた、語られた表現と、語られるべき現実との間のずれは、そのままイエスの欲望とユダの欲望の間のずれとなる。皮肉なことに、語りの上ではあくまで同化を拒み、イエスに背き続けるユダは、何よりも、彼が語り始めたということそのものによって、他ならぬ「あの人」の欲望に融解してしていくのである。なお敬愛を示す接吻によって裏切りの表明とする、最もアイロニカルな場面が作品に描かれていない点については、「小鳥の声」や「嘘ばかり申し上げ」たというユダの言葉とともに今後の課題としたい。

【註】

(1) 書誌は山内祥史「『駄込み訴へ』の書誌」に詳しい。なお、初出は『解釈』第十六巻六号（解釈学会・一九七〇年）だが、ここでは『解釈』所収論文集『太宰治の文学』（教育出版センター・一九七三年）を参照した。

(2) ナショナルジオグラフィック『原典 ユダの福音書』（日経ナショナルジオグラフィック社・二〇〇六年）「はじめに」（十六）

(3) 同右、「イエス、洗礼を受けたユダの裏切りについて語る」（六九頁）

(4) 森厚子「太宰治『駄込み訴へ』について——語りの構造に関する試論——」（『解釈』第二十五巻二号（解釈学会・一九七九年））「過去形で語られるはずの出来事やその時の感情と、それを思い起こし訴えている現在のユダの行為とは時間的・空間的に異なった世界に在るはずであり（中略）この両者は様々な形をとって交錯している。」

(5) 津島美知子「思ひ出の断片」（奥野健男編『太宰治全集別巻 筑摩全集類聚』筑摩書房・一九七二年）「(前略)『中央公論』から、依頼を受けたのは、これが最初でしたから、意気込みも、格別であったように思われます。（中略）『駄込み訴へ』

のときは、二度に分けて、口述しましたが、淀みも言い直しもなく、さながら、蚕が糸を吐くように続いて、言った通り筆記してそのまま文章でした。」(三三六頁)

- (6) 一九四〇年四月発行「文学者」第二巻四号「随筆」欄に発表。本文引用は『太宰治全集10』（筑摩書房・一九九〇年）(一九五頁)に拠った。

- (7) 野原一夫氏は、『日本近代文学館』第一六四号(日本近代文学館・一九九八年)収録の「太宰治の口述筆記」において、「おそらく太宰は、完成稿とそれほど違わぬ草稿をすでに書き上げ、頭の中にインプットし、それを咀嚼しつつ、口述したのではあるまいか。」と述べている。

- (8) 平野謙「太宰治論」(初出は『現代日本文学全集49』(岩波書店・一九五四年)だが、ここでは奥野健男編『太宰治研究——その文学——』(筑摩書房・一九七八年)によった。)

- (9) 「反律法」の役割を自らに課した太宰治の文学」としての読みを示した。『石大臣実朝』における実朝と公暁、『斜陽』の母とかず子、直治の関係に引き継がれていくと指摘している。
(新潮文庫版『走れメロス』新潮社・一九六七年収録、奥野健男「解説」)

- (10) 「太宰治の作品を年代順に見ると、大きく三つの時期を劃し

ていることがわかります。」(奥野健男『太宰治』文春文庫・一九九八年、「その作品」とあり、一九三二年から一九三七年「晩年」から『HUMAN LOST』までを(前期)、一九三八年から一九四五五年の『満願』から『お伽草紙』までを(中期)、一九四五年から一九四八年『バンドラの匣』から『人間失格』『グッド・バイ』までを(後期)としている。(二六八頁)

- (11) 東郷克美・渡部芳紀編『作訳論太宰治』双文社・一九七四年
(12) 『太宰治論 作品からのアプローチ』雁書館・一九八二年
(13) 『国文学 解釈と教材の研究』二十四巻九号(学燈社・一九七九年七月)

- (14) 『一冊の講座 太宰治 日本の近代文学5』有精堂出版・一九八三年

- (15) 『静岡近代文学1』静岡近代文学研究会・一九八六年
(16) 『静岡近代文学2』静岡近代文学研究会・一九八七年

- (17) 『稿本近代文学16』筑波大学日本文学会近代部会・一九九一年

- (18) 『活水日文』活水学院日本文学会・一九九二年

- (19) 『京都語文』佛敎大学国語国文学会・一九九八年

- (20) 『ユリイカ6月臨時増刊 総特集太宰治 没後五〇年記念特集』青土社・一九九八年

- (21) 『太宰治〈語り〉の場』という装置』双文社・二〇一二年
- (22) 『国文学 解釈と教材の研究』二十一巻六号(学燈社・一九七六年五月)
- (23) 佐古純一郎編『太宰治と聖書』教文館・一九八三年
- (24) 『武蔵野大学人文学会雑誌』(原題「太宰治とキリスト教——山岸外史との関係から」)十五巻一号・一九八三年十月(本稿ではいずれも田中良彦『太宰治と「聖書知識」』(朝文社・一九九四年)を参照した。)
- (25) 『太宰文学の研究』東京堂出版・一九九八年
- (26) 『季刊 icchiko』一〇八巻・文化科学高等研究院出版局・二〇一〇年(原題「「駈込み訴へ」を読む——山岸外史「人間キリスト記」との接点から」だが、ここでは『太宰治の虚構』(和泉書院・二〇一五年)を参照した。)
- (27) 『国文学 解釈と教材の研究』二十七巻七号(学燈社・一九八二年五月)
- (28) 『国文学 解釈と鑑賞』四十八巻九号(至文堂・一九八三年六月)
- (29) 『日本文学講座6』大修館書店・一九八八年(本稿では東郷克美『太宰治という物語』「女性独白文体の発見」(二〇〇一年・筑摩書房)を参照した。)
- (30) 『解釈』第二十五巻二号(解釈学会・一九七九年二月)
- (31) 『太宰治研究叢書2』近代文芸社・一九九三年
- (32) 『国文学 解釈と教材の研究』五十三巻四号(学燈社・二〇〇八年三月)
- (33) ①(マタイ8:20)(ルカ9:58) ②(マタイ20:20-22)(マルコ10:35-38) ③(マタイ14:15-21)(マルコ6:35-44)(ルカ9:12-17)(ヨハネ6:5-13) ④(マタイ6:16-18) ⑤(マタイ4:18-22)(マルコ1:16-20)(ルカ5:8-11) ⑥(マタイ23:12)(ルカ14:11)(箴言29:23) ⑦(マタイ26:6-13)(マルコ14:3-9)(ルカ7:36-50) ヨハネ(12:1-7) マタイ、マルコではベタニアのシモンの家での出来事で、油を注ぐのは「一人の女」とされる。ルカでは「埋葬の日のため」の行為とはされず、油を注いだのは「罪深い女」である。ヨハネではベタニアのラザロのマリアが油を注ぐ。⑧(ルカ10:38-42)(ヨハネ12:2) ⑨(マタイ21:1-7)(マルコ11:1-7)(ルカ19:30-35)(ヨハネ12:14-16) ⑩(ゼカリヤ9:9)(マタイ21:7-9)(マルコ11:8-10)(ルカ19:30-38)(ヨハネ12:12-15)(列王記下9:13)(詩編118:26-27) マタイ、マルコではエルサレム入城の後に塗油物語が配置されるが、

ヨハネでは本作同様にベタニアの香油の翌日にエルサレム入城が描かれる。①(マタイ21・12-13) (マルコ11・15-17) (ルカ19・45-46) (ヨハネ2・13-19/21) (イザヤ56・7) ②(マタイ23・25-28/33) (ルカ11・39/44) ③(マタイ23・33) (ルカ13・34) ④(マタイ24・7/28-30) (マルコ13・8・24-25) (ルカ21・10-11・25-26) (イザヤ19・2) (歴代誌下15・5-7) ⑤(マタイ26・3-5) (マルコ14・1-2) (ルカ22・1-5) (ヨハネ11・49-57) イエスを殺す計略において、金銭についての言及があるのは「ルカによる福音書」のみであり、さらに「祭司長たちや神殿の管理者」とユダの間に「金を与える」約束が交わされている。

⑥(ヨハネ13・4-10) ⑦(マタイ26・19-25) (マルコ14・17-21) (ルカ22・21-23) (ヨハネ13・21-30) (詩編41・10)

(34) 原口尚彰『信じることと知ること——新しいキリスト教概説——』第二章 聖書 第四節 新約聖書概観(東北大学出版会・二〇〇五年)では、「最も短いマルコによる福音書が最古の福音書であり(紀元70年頃)、そもそも、イエスの生涯とその教えを物語の形で表現する福音書(Evangelium/Gospel)」「福音書＝良い知らせの書」という文学形式は、この書によっ

て成立した。」と説明しており、「マルコによる福音書」から様々な編纂意図をもって、のちに「マタイによる福音書」「ルカによる福音書」「ヨハネによる福音書」が成立している。「マタイによる福音書」「ルカによる福音書」は大まかな物語の順序が類似するものの、「ヨハネによる福音書」は「マタイによる福音書」「ルカによる福音書」を踏襲しながらも物語の順序が異なる箇所が多い。

(35) 「ヨハネによる福音書」においては弟子を選ぶ際に職業についての言及は無いが、そもそも「新約聖書」にユダが商人であることを明かす記述はない。また、「マタイによる福音書」では「徴税人のマタイ」(10・3)が存在しており、金銭の扱いに長けた人物であることが予想されるが、『駈込み訴へ』においては言及されない弟子である。つまり、太宰がユダを創作するにあたって、「金銭」という資質をユダに担わせるべく「徴税人のマタイ」が除かれた可能性が考えられる。さらに、本作が山岸外史『人間キリスト記』(初出「コギト」一九三七年十二月から一九三八年六月連載。同年、第一書房より単行本刊行)の影響を受けたものであることは菊田義孝氏「ユダの心——駈込み訴へ」と山岸外史著『人間キリスト記』(註22を参照)をはじめ諸家が指摘する通りであり、

山岸外史のユダは「買い物上手」であり「世間」の象徴「商人の子」（ユダの章）とされるが、ユダが明確に商人としての自己認識を持っていたか否かについては記述されない。ユダが彼自身を「商人」として明確に定義するのは、太宰の創作であると考えられるだろう。

(36) 西原千博氏「『駄込み訴へ』試論」では（註16に同じ）において、ユダはあくまでイエスに対し「庇護者」であることに存在意義を見出しているとした。

(37) 「ペテロやヤコブたちは、ただ、あなたに附いて歩いて、何かいいこともあるかと、それはかりを考えてゐるのです。」

(38) 高橋氏は「太宰治「駄込み訴へ」と聖書」（註15に同じ）において、太宰はユダを「人間的な人間」として配置し、「傷つけ合い」以上の結果を見ようとしたと捉えている。

(39) 高橋氏は「太宰治「駄込み訴へ」と聖書」（註15に同じ）において、「人間としての寂しさを通わせ合える「人の子」イエスを、ユダは切望していた」と指摘し、さらにユダは「イエスの寂しさを手にしたと思える時、幸福」であったと捉えている。一方で、これを受けて発表された西原千博氏「『駄込み訴へ』試論」では（註16に同じ）において、ユダはあくまでイエスに対し「庇護者」であることに存在意義を見出し

ており、かつ「イエスの存在を否定することによって自らの存在（アイデンティティ）を確認した」と捉えており、イエスとユダの関係性が対照的に捉えられている点が興味深い。他の福音書については、「弟子たちはこれを見て、憤慨して言った」（マタイ26:8）、「ある人々が憤慨して互いに言った」（14:4）とされている。「ルカによる福音書」での塗油はイエスの葬いの準備ではなく、罪深い女への赦しの行為として描写されているため、弟子たちの憤慨は描かれていない。

(41) 列王記上（1:34）には「イスラエルの王」となる者が香油を注がれ、イザヤ書（61:1）には「主なる神の霊が私に臨んだ。／主が私に油を注いだからである。／苦しむ人に良い知らせを伝えるため／主が私を遣わされた」とあり、油を注がれた者の意味が王から転じて人々を導く者、すなわち救い主（＝メシア）となる。油を注がれたものは不可侵の存在とされ、主の霊が下り、神聖性が与えられた。（旧約・新約聖書大事典「教文館・一九八九年を参照した。」）

(42) 洗足は食事の前に行われた習慣。召使の仕事であり、他人に仕える奉仕の行為であることから転じて「善行」となる。イエスによる洗足に限れば、イエスが多くの者のための存在であることを示す徴であり、神との交わりとしての意味も持つ。

(註41に同じ)

(43) 「第五章 聖霊の働きと教会 第四節 聖礼典 (2) 聖餐」東
北大学出版会・二〇〇五年

(44) 「創世記」二章十六節から三章二十四節にわたって記述され
る。

(45) 岡田温司『キリストの身体 血と愛と肉の傷』パンとワイン、
あるいはキリストの血と肉」中公新書19998・二〇〇九年

(46) 「いずれにしても、ヨハネにとってユダは、その裏切り行為
の故にはじめから終わりまで「悪魔」(ヨハ670)であり、

「滅びの子」(一七12)であるが、それも聖書が成就されるた
めの、イエス自身の積極的な促しのもとにあるのだ。」(荒井

献『ユダとは誰か——原始キリスト教と『ユダの福音書』の
中のユダ——』「第五章 盗人にして悪魔——ヨハネによる
福音書」岩波書店・二〇〇七年)

(47) 「マタイによる福音書」(26・24) はじめ、多く見られる言ひ
回しである。

(48) 「ゼカリヤ書」十二章十節から十三節に「私は「好意」という
私の杖を取って折り、私がすべての民と結んだわが契約を破
棄した。その日、それは無効にされた。私を見守っていた羊
の商人は、それが主の言葉であることを知った。(中略) 彼

等は私の賃金として銀三十シケルを支払った。主は私に言

われた。「私が彼らによって値踏みされた尊い価を、陶工に
投げ与えよ。」そこで私は銀三十を取り、それを主の神殿で
陶工に投げ与えた。」とあり、「マタイによる福音書」二十七

章三章から七章では自殺したユダが司長や長老たちに返そう
とした「銀貨三十枚」で「陶工の畑」を買ったことが記述さ
れ、さらに「預言者エレミヤを通して言われていたこと」で

であると明かす。「新約聖書」にはユダが「商人」である記述
がなされていない為「ゼカリヤ書」の「羊の商人」に着想を
得たと考えることも可能であろう。

(49) 山口浩之氏『「駢込み訴へ」試論——小鳥の声の獲得——』(註
18に同じ)では、「花は、しばまぬうちこそ、花である」と

ユダが語る箇所に触れ、「嫉妬を自身からも隠蔽するための
美の防衛という口実」を指摘している。

(50) 山田晃氏「聖書・論語・愛——「駢込み訴へ」雑記(註14)
に同じ。

(51) 『日本大百科全書』(小学館・一九九四年)より引用、『日本
国語大辞典』(小学館・二〇〇〇年―二〇〇二年)、『広辞苑』

第六版(岩波書店・二〇〇八年)、『名鏡国語辞典』(大修館書
店・二〇一一年)を参考としたが、ここではすべての辞書・

事典に共通している（性愛の対象を同性とする）一点のみを定義とする。

(52)

「マタイによる福音書」(26:49)「マルコによる福音書」(14:14)には接吻によってイエスを裏切るユダが描かれるが、「ヨハネによる福音書」には接吻による裏切りを描いていない。聖書中に描かれる接吻の意味は敬意、愛情表現、性愛的なものも存在しているが、福音書中に描かれるユダの接吻は「敬意を装った欺瞞の口づけ」とされている。(註41に同じ)

(53)

そもそも、「新約聖書」の元となったとされる「マルコによる福音書」(3:19)には、本稿で使用したのを見る限り「このユダがイエスを裏切ったのである」とあるが、一方で「裏切」と訳される元の語は「paradidomi」であり、別訳として挙げられている「引き渡した」の意も含むものである。(荒井献「ユダとは誰か 原始キリスト教と福音書の中のユダ」「I 原始キリスト教とユダ 第一章イスカリオテのユダ——名前の由来とその意味」岩波文庫・二〇〇七年を参照した。)

【参考文献】

〔使用テキスト〕

- ・『大宰治全集3』筑摩書房・一九八九年
- ・『大宰治全集10』筑摩書房・一九九〇年
- ・『聖書 聖書協会共同訳』日本聖書協会・二〇一八年

〔辞書・事典〕

- ・『日本大百科全書』小学館・一九九四年
- ・『日本国語大辞典』小学館・二〇〇〇年～二〇〇二年
- ・『広辞苑 第六版』岩波書店・二〇〇八年
- ・『明鏡国語辞典』大修館書店・二〇一一年
- ・『キリスト教大事典 改定新版』教文館・一九七〇年
- ・『旧約・新約聖書大事典』教文館・一九八九年
- ・『聖書文化事典』本の友社・一九九六年
- ・神谷忠孝・安藤宏編『大宰治全作品研究事典』勉誠社・一九九五年
- ・志村有弘・渡部芳紀編『大宰治大辞典』勉誠出版・二〇〇五年

〔書籍〕

- ・奥野健男編『筑摩全集類聚 太宰治全集別巻 太宰治研究』筑摩書房・一九七二年
- ・奥野健男編『太宰治研究——その文学——』筑摩書房・一九七八年
- ・赤司道夫『太宰治——その心の遍歴と聖書』八木書店・一九八五年
- ・三好行雄編『太宰治必携』學燈社・一九八一年
- ・津島美知子『回想の太宰治』人文書院・一九七八年
- ・田中良彦『太宰治と「聖書知識」』朝文社・一九九四年
- ・東郷克美編『別冊国文学47 太宰治辞典』学燈社・一九九四年
- ・荒井猷『イエス・キリスト上 三福音書による』講談社・二〇〇一年
- ・荒井猷『イエス・キリスト下 その言葉と業』講談社・二〇〇一年
- ・竹内和子編『「ポスト」フェミニズム（知の攻略 思想読本）』作品社・二〇〇三年
- ・原口尚彰『信じるごとと知ること——新しいキリスト教概説——』東北大学出版会・二〇〇五年
- ・大橋洋一編『現代批評理論のすべて』新書館・二〇〇六年

- ・ナシヨナルジオグラフィック『原典 ユダの福音書』日経ナシヨナルジオグラフィック社・二〇〇六年
- ・荒井猷『ユダとは誰か——原始キリスト教と『ユダの福音書』の中のユダ——』岩波書店・二〇〇七年
- ・岡田温司『キリストの身体 血と愛と肉の傷』中公新書1998・二〇〇九年
- ・『KAWADE夢ムック 文藝別冊「総特集」太宰治』河出書房新社・二〇〇九年
- ・山岸外史『人間キリスト記 或は神に欺かれた男』柏艸舎・二〇一三年（初出は『ゴギト』一九三七年十二月から翌年六月にかけて連載、一九三八年に単行本として第一出版から刊行された。）